

バイアスを取り除くところから

今日は子ども向けのお話なんですけれども、難しい言葉が説教のタイトルに含まれています。「バイアス」という言葉です。「バイアス」って何でしょう？子どもたちは分かるかな？「バイアス」というのは英語です。日本語に翻訳すると、「偏見」という意味になります。この「偏見」という日本語も難しいですね。分かりやすく説明しましょう。

「バイアス」＝「偏見」というのは、一言で言うと偏った見方による思いこみのことです。たとえば私は大阪の人間なんですけれども、よく「阪神ファンですか？」と聞かれます。関西の人でも巨人ファンの人はいらるだろうし、中日ドラゴンズのファンだって実際にはいるわけですが、関西人だったらもう阪神ファンだろうという思い込み、決めつけがそこにはあるわけです。こういう勝手な見方による勝手な思い込み、決めつけを「バイアス」＝「偏見」と言うんですね。

で、さっきの話ぐらいのことだったら別にそこまで不愉快な思いはしないんですけども、たとえばこれが「先生、大阪の人間なんだから、物を買う時には値切るんでしょ」とか、「関西の人ってがめついんでしょ」とかいった具合になってくればどうでしょう？良い思いはしませんね。傷つきます。そこまで来ればもう関西人に対する差別です。こんな風に「バイアス」＝「偏見」というのは差別に結びついてくるんですね。

私のサークル時代の先輩もドイツに留学した時に、アジア人差別を経験したと言っていました。「日本人、アジア人というのはこういう奴らだ」と勝手な見方、勝手な思い込み、勝手な決めつけをされて、理不尽にひどい扱いを受けるわけです。本当に「バイアス」＝「偏見」というのは差別のもとです。今日は聖書の中から使徒言行録11：1～18を読んでもらいましたが、この「バイアス」＝「偏見」というのがこのお話を理解する一つのキーワードになりますので、まずはお話の初めに「バイアス」＝「偏見」

という言葉を押さえておきましょう。

さて、今日取り上げた聖書箇所は、ペトロさんがエルサレムの教会の人々に、異邦人であるコルネリウスさんたちに洗礼を授けたいきさつを詳しく報告した場面です。異邦人というのはユダヤ人以外の人々なんですが、当時ユダヤ人たちがこの異邦人のことをどういう風に考えていたか、そしてどういう風に接していたかというのを、まずは簡単に説明しておきましょう。

イエス様の時代もパウロさんの時代も、異邦人はユダヤ人たちによって律法という神様の掟を知らない人々、なので神様の掟を守らない「罪人」、「穢れた人々」、「救われることのない人々」として考えられていました。そういう「バイアス」、「偏見」をユダヤ人たちは持っていたんですね。自分たちユダヤ人こそが、自分たちユダヤ人だけが神様の掟を知っているのであって、そして救われるのであって、神様の掟を知らないし、守らない異邦人の穢れがうつってはいけません。ユダヤ人たちはそう考えて異邦人と接することすら断っていたと言います。そういう差別があったわけです。

今日の聖書箇所でも、ユダヤ人たちが「あなたは異邦人のところに行って一緒に食事をした」とペトロさんを非難していますが、それはそういうわけなんです。異邦人は「罪人」、「穢れた人々」だ。付き合うな。食事も一緒にするな。それが当時のユダヤ人の、また教会の当たり前でした。そんな異邦人にペトロさんが洗礼を授けたというわけですから、当時のエルサレムの教会の人々は「信じられない」といった思いで大騒ぎになっていたことでしょう。そんな人々に、ペトロさんが、自分がコルネリウスさんを初め、異邦人たちに洗礼を授けたいきさつを詳しく説明したのが今日の聖書箇所です。

ここでペトロさんは不思議な体験を語っています。ヤッファという町にある革なめし職人のシモンさんという人の家で祈っていた時の経験です。この時、ペトロさんは、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天から自分のところまで下りて来る

のを見たのでした。その入れ物の中には、「地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥など」、つまりユダヤ教で穢れているとされていたもの、律法という神様の掟で食べてはいけないとされていたものが入っていました。でも神様の声が聞こえて来て、「身を起こし、屠って食べなさい」と言うのです。神様の掟をよく知っているペトロさんは当然、「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた者は口にすることがありません」とこれを拒否しました。そんなペトロさんに、神様は、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」とお告げになるのです。

これは明らかに神様がペトロさんの常識を変えようとしてくださった出来事に他なりません。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」。私は異邦人もイエス・キリストを通して自分の子どもとして愛することに決めたのだ。異邦人が穢れているなどと言って差別してはならない。神様は直接ペトロさんに幻を示してこうお教えになったんですね。そしてこの出来事に背中を押されたペトロさんは異邦人であるコリネリウスさんの家に行き、イエス様の御生涯、そしてそれを通して地上に注がれる神様の愛を伝えます。するとコルネリウスさんたちの上に聖霊が降ったので、こうしてコルネリウスさんたちはペトロさんから洗礼を受けたのでした。

この報告を聞いたエルサレム教会の人々の反応はどうだったでしょうか。今日の18節に記されています。「この言葉を聞いて人々は静まり、『それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ』と言って、神を賛美した。」エルサレムの教会の人々は自分たちユダヤ人だけが救われるのだと考えて、異邦人を「罪人」、「穢れた人々」として差別していましたが、ペトロさんも、ペトロさんの言葉を聞いたユダヤ人たち教会の人々も変えられました。皆、変えられたんです。

こんな風に昔々の教会の人々が、神様の愛を人々に伝えていくにあたってまず自分たちのバイアス＝偏見を取り除いたということを私たちはしっかりと押さえておきたいと思います。それはもちろん神様に導かれてのことなのですが、心の中にバイアス＝偏見がある限り、人と人との間に心の壁ができてしまって、神様の愛を伝えること

ができなくなってしまうのです。

ここで自分自身のことを振り返ってみて、今の私たちも昔々の教会の人々のように、心の中にたくさんのバイアス＝偏見を持ってはいないでしょうか。私たちが生きているこの社会には今も、外国人に対して、セクシャルマイノリティの人々に対して、障がい者に対して、ホームレスの人々に対して、ある出自の人々に対してといったように、色々な人々に対するバイアス＝偏見が溢れています。そして私たちも無意識のうちにそうしたバイアス＝偏見に囚われて、心に壁を作ってしまうのです。

私たちは一人ひとり神様の愛を伝えるためにこの世界に遣わされていく者ですが、まずはバイアス＝偏見を取り除くところからその働きを始めていきましょう。そしてすべての人々に神様の愛を伝えていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——